ぐうたら生活入門

遠藤周作

昭和四十六年十二月三十日　初版発行
昭和四十八年四月二十日　十六版発行

定価は、帯・カバーに明記してあります

著作者　遠藤周作
発行者　角川源義
印刷者　村沢達弘
東京都港区新橋四ノ三十ノ八

角川文庫
ぐうたら生活入門

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京一九五二〇八
電話東京(263)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　旭印刷・本間製本
0193-124506-0946(0)

ぐうたら生活入門

遠藤周作

角川文庫

2851

狐狸庵山人

北杜夫

狸の大王の化け損なった人物、狐狸庵山人は、俗塵を離れ、今日も筧の水音に耳を傾けつつ高遠なる思索にふける、と思いきや、この御仁、俗塵が大好きで、心根優しく、かつオッチョコチョイ、東に悩める乙女あれば、行って悩みを聞いてやり、親切すぎてあとあとまでつきまとわれ、西にお好きな女優さんのテレビあれば行って無理矢理出演、視聴率ぐんと下げ、それでも演技賞ものとほざき、南に高級料理店ひらけば、行って玄関口など覗き、人に会って言うことには、ああ、あそこの店なら四十回ほど食うた、北に病人あれば、行って焼栗など与え、人に会って言うことには、めろん五個を見舞うてやった、かくのごとく、一つのことは十、十のことは百としゃべりかつ書く性なれば、人呼んでホラふき狐狸庵、しかし今日も武蔵野の野辺に佇む山人の心、君知るや、行く水、帰る雲にかげりを落す玉顔、そぞろに奥ゆかしくも寂し。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

狐狸庵山人　北杜夫　三

人生ケチに徹すべし　後悔しながら浪費する人たち　一一

語るにたる〝気の弱い奴〟　よく、その心情、理解できる人たち　一八

亭主族の哀しみ　この小心で孤独な除け者の存在　二六

〝嫌がらせ〟のすすめ　この高度な批評精神　三三

正義漢づらをするな　自分だけが正しいとして他を裁く独善主義　四〇

自己催眠で社長になった男　空想力も使いよう　四七

女のウソと男のウソ　女は全身全霊でウソをつく　五五
女の執念　女優さんもキチガイ女も同じ　六三
人生の寂莫を感じるとき　駄犬と人間が似ている話　七一
鼻もちならぬ洋行自慢　駆け足旅行で廻ったくせに　七六
人間の運命を変えるもの　ばかにできない生理現象　八六
ばからしい人間の集り　披露宴にみる人間の醜態　九四
人生どうせチンチンゴミの会　わが風流の集い　一〇三
人生とは退屈なり　わが某月某日の記　一〇八
嫁いじめを復活させよ　心にもない仏づらはもう捨てよう　一一五
人生のことを語りたい　自分の本当の顔をとりもどすとき　一二一
照れくささのない人間　その動物なみの恥ずかしさ　一二七
ケチ合戦　狐狸庵対ドクトル・マンボウ　一三三

女にはわからない男の美点　弱気な男、結構　一四〇
怪　談　(1)　幽霊屋敷探訪記　一四六
怪　談　(2)　ウソでないホントの話　一五二
男と女の生きる道　ある献身的なメス猫の話　一五八
それでも彼女を愛す　わが映画評　一六四
迷惑な話　わが乗り物談義　一七〇
当たった二十年前の予言　いまだにわからぬそのカラクリ　一七七
あなたも催眠術がかけられる　人間は未来を予見できる　一八三
運命を知る知恵　合理主義ではとけぬ占い師の存在　一八九
あとがき　一九五

ぐうたら生活入門

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

人生ケチに徹すべし

後悔しながら浪費する人たち

フランス人のケチ

リヨンという町にいた時、夜、遅くまで本を読んでいると、下宿の奥さんが部屋に来て、

「夜ふかしは体に毒だよ」

と心配してくれる。それでも読み続けていると、

「寝ないなら、お前の健康のため、あたしが電源を切るよ」

健康を心配するという口実のもとに、パチリ、電気を消してしまうのである。

真っ暗にされれば寝ないわけにはいかぬ。しかし子供じゃあるまいし、九時や十時に灯を消されては仕方ないから、翌日から、本を持って近所のカフェに行った。

だが婆さんは私がカフェに行くことには文句は言わない。言わないところをみると、彼女は私の健康を心配してくれたのではなく、電気代をケチっていたのである。かねがねフランス人はケチだと聞いていたが、そのケチにぶっつかったのは、これが初めてであった。

だが、そのうち次第に、この婆さんだけではなく、フランス人の中産階級は大体においてケチであることがわかってきた。ケチという言葉に語弊があるならば、ムダ遣いをしないと言ってもよい。とにかく、ムダ遣いをしない。学生を例にとるならば、本さえあまり買わない。では本はどうするかというと、図書館をできるだけ利用するのである。

自信のなさが浪費を

私はその時、私をふくめてこの国にたち寄る日本人旅行者が、はなはだゼイタクであることを知った。もちろん彼等は旅行者であるから金をパッパッと使うのは仕方ないのであるが、その使い方を観察していると、フランス人にくらべてはるかに浪費している。使わないでいいところに金を使っている。たとえばレストランに入って、フランス人なら一割しかチップをやらぬのに二割はずむ。地下鉄なら二等に乗ればいいのに一等に乗っている。わずかな金額の差だと言ってしまえばそれまでだが、やはり浪費である。

そこで、私のような男にもハタと膝をうつものがあった。浪費の感情の中にはいろいろな理由があるが、その最も主なものの一つには「自分にたいする自信のなさ」があるのではないかと。日本人が海外においてゼイタクなのは、一種の劣等感のあらわれなのではないかと。日本にいる時にざるソバ一杯で百円札を出し、おツリが十円足りんと言って真っ赤になるオッさんが、花の

都、パリでは、

「とっとき給え、チップだ」

二倍のチップをボーイにはずむ。

「メルシー・ムッシュー」

そう言われて嬉しがっている心情には、白人国に旅行している日本人の背伸びした姿勢がたしかにひそんでいるわけだ。浪費の中には虚栄心とともに、自信のなさがこの場合にたしかにあるのである。

そう言えば、女の子とデートした時の男の浪費の仕方にもこの心情が働いている。たとえばこの私を例にとろう。私は平生、映画なら八時以後を狙って行くような男である。夜間割引という札が切符売り場の窓口にかかって二割は少なくとも安くならねば映画館には入らん。

そんな男がたまさか女の子と映画館に行けば無理して指定席だ。指定席七百円ナリ。映画が終わって外に出ればすでに日暮れて真っ暗。おなかがすいたわと彼女がのたまう。おのれ一人ならば、屋台のラーメンで腹の虫をおさえるのだが、彼女に上品なところを見せるため Restaurant と書いた店に入る。白いテーブルに白い壁。

諸君も経験がおありだろうが、こういうところのボーイが意地悪でねえ。女の子づれの男とみると、わざとうやうやしくいんぎんに頭をさげるものです。わけのわからん料理を並べたメニュ

ーをさしだし、わざと一番、高いものを指さして、

「ブタペスト風オニオンスープとボルドー風シチューはいかがでございましょう」

「ああ、それでいいだろう。それを持ってきてくれ給え」

こういう経験あるでしょう。ブタペスト風オニオンスープか何か知らんが口に入れても味けなく、心の中では、映画代七百円、それに料理二つでどんなに少なく見つもっても千八百円はとられるぞ。合わせて二千五百円か。おれはバカだ。浪費家だ。ムダ遣い屋のだらしない男だ。惜しい、じつに惜しい。そう思わなかった男性は世の中に一人だっていないはずはないだろう。

もし彼が――いや私が、自分に自信があるならば、たとえ彼女をラーメン屋に誘っても、わが高尚な人格、上品な趣味をみせると思ったであろう。

だが自分はそのような高尚な人格者ではなく、ビキニ姿の娘を見れば胸ドキドキし、鼻クソほじくって指先で飛ばしては喜ぶような男であるゆえに、彼女の前では上品なところを示すため、無理してレストランなどに入ったのである。海外における日本人の浪費と女の子づれの男の浪費にはこのように共通したものがあるのだ。

貧乏人ほど浪費家

金持ちほどケチで、貧乏人や田舎者ほど浪費家だという言葉があるが、いかんせん、この言葉

はある意味で真実だ。

「おい。ここはおれに払わせろよ」

「いいよ、いいよ、おれが払うってば」

「なにィ、お前はおれに恥をかかす気か。ここの店はおれの縄ばりだ。おれが払うのが当たり前だ」

よく飲み屋でいい年をした男が大声をあげて喧嘩をしているが、おれが払う、いや、払わさんと言うような連中はたいてい、そう金には縁のない顔をした連中である。おれの縄ばりもへったくれもない。彼は自分を金がない、ケチだと思われたくないからおごる、おごると言うだけである。これが金持ちだと、ワリカンでいこうと平然と言える。自分のふところに自信があるからである。

こう書くと私はいかにも浪費家を軽蔑しているように聞こえるかも知れないが、じつは私は自分と同じようにオドオドしながら(つまり本当はケチなくせに)、わが自信のなさから浪費してしまうような人物が大好きなのである。

徹底したケチ精神

私のような男は浪費をするたびにチェッ、チェッと舌打ちをする。女の子におごったあとほど

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton